

日本軍性暴力被害女性の証言を聞く

今年の8月14日～21日、「日中友好・希望の翼」に参加して訪中した。主な目的は「南京大虐殺記念館」の見学および南京大虐殺跡地のフィールドワークだったが、現地で二人の日本軍性暴力被害女性（元「慰安婦」）から証言を聞くことができた。その時のようすと私なりに感じたことを述べてみたい。

8月17日午後、武漢のホテルで会った元「慰安婦」（性奴隷）の女性は現在75歳。小柄で可愛いおばあちゃんという感じだった。しかし最初故郷韓国の話を始めたときからもう涙が出て何度もハンカチで目を押さえた。無理矢理連れて行かれる時母親が弟をおぶって追いかけてきたと行った後、話ができなくなったりした。通訳をしていた中国人女性が「おばあちゃんが泣くと私も泣けてきて通訳できない」と涙声になった。聞いていた私たちも同じ思いだった。いくら歴史の真実を学ぶためとはいえ、こんなつらい話をさせていいのだろうか。それでも彼女は気を取り直して、自分の体験を一生懸命語った。記憶の確かさに驚いた。いかに過酷で忘れようとしても忘れることのできない体験だったことか。話に引きまわっていた私たちは、彼女の具合が悪くなったことにも最初気づかなかった。気持ちが高ぶるとともに血圧も上がったらしい。後で聞いた話によると、彼女の席の近くにたまたま団員の男性が多く座っていたことも原因だったようだ。「彼女たちは今でも日本人の男性には恐怖を感じる。そこを配慮しなくて申し訳なかった」とメンバーの1人が言った。そして続けて「彼女は韓国のドキュメンタリー映画に出演しているが、それは映画のスタッフの人たちに対する信頼関係があったればこそで、初対面の我々との関係を同じように考えてはいけない。名前や顔を出すことは遠慮してもらいたい」ということばに一同うなずいた。

翌18日、武漢郊外の孝感市湖西村に住んでいるもう一人の元「慰安婦」の女性を訪ねた。役場の職員に案内してもらって狭い畑道を山の方に入っていくが、途中でバスは行けなくなった。今年80歳になるというその女性は現在体調を崩しているのに、大勢で訪問するのはやめよう、また日本人の男性は遠慮してもらおうということになり、女性2名が代表で行くことになった。その大役の一人になった私は緊張しながらその女性に会いに行った。痩せて小柄なやさしい顔をしたおばあさんだった。彼女は体の調子が良くないと言いながらも、村の小さな広場で椅子に腰掛けて、村中の老若男女が見守る中で私たちに話をしてくれた。

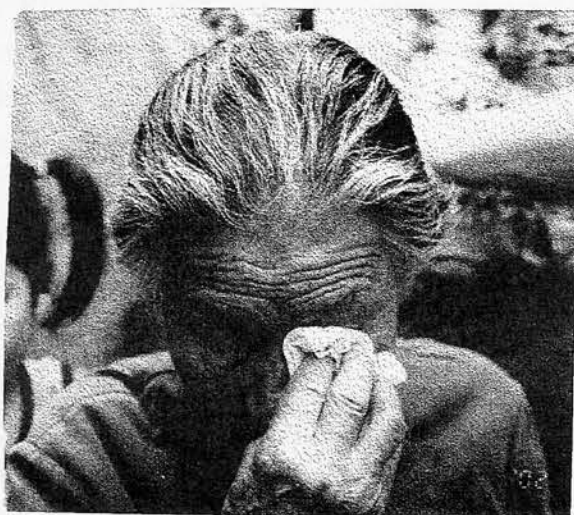
時折ハンカチで涙を拭きながら話す姿を見ていると、中国語は全くわからないけれども、またつらい話をさせていると思って私も悲しくなった。あの話になると女性はみんな泣く。最後に彼女の家に案内された後、団からのプレゼントの品を渡す時、私は彼女の肩を抱いて声を上げて泣いてしまった。これまで戦時下における性暴力被害の女性たちの証言を何回も聞いたし、本で読んだりもしてきた。そのたびに涙が出たり、憤ったりしてきたが、それは証言を聞く多数の中の一人としてであった。今回のように1対1のような状況で被害女性の存在を身近に感じながら聞くと、悲しみや怒りが10倍にもなるということを実感した。

戦争では弱い立場の人々が最もひどく痛めつけられると言うが、人を殺すことを強られる男性兵士の非人間的な攻撃は一番に女性に向かうのではないだろうか。それは過去の戦争だけの話ではない。現在の戦争においても戦時下の性暴力は起こっている。ユーゴスラヴィア紛争しかり、湾岸戦争しかり。男女平等が当たり前という世の中でも、ひとたび戦争になったら女はやられると思う。だからこそ絶対に戦争は起こしてはならないのだ。

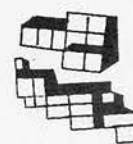
武漢の女性は日本政府に対して「私の人生を狂わせた。謝罪と補償を求めたい。またこのような悪いことを二度と、特に日本の若者にさせてほしくない」と言った。湖西村の女性は日本政府に対して何か言いたいことがないかという質問に対して「私はもう先がない。もう何も言う気はない」と話した。このような彼女たちの思いを私はどのように受け止め、どのように行動したらいいのか。

現実の生活に戻れば、「男女共同参画社会の実現」「女性議員をふやそう」などの女性運動や平和運動で手いっぱいの毎日のなかでは、日本軍性奴隷制を告発する中央の市民グループに対して経済的支援しかできない状態だが、この「慰安婦」制度は最大の女性差別だという認識だけは持ち続けて、私なりに何ができるか模索していきたい。湖西村の女性が別れ際に言った「自分を振り向いてくれてうれしい」ということばを心にとめて……

(文責 門 更月)



涙をふく湖西村の女性



100年前の女性でも

不当に辱められたくない!

葛西よう子

維新前後の長崎で 茶の日本最初の輸出業者として活躍した大浦慶という女性がいまし
た。長崎の巷では伝説に彩られた女性で「17才で結婚した養子の夫を一晚で追い出した
生涯結婚しなかったが 好色で雇い人を次々に〜 坂本竜馬を始めとする維新の志士達に
資金援助をすると同時に愛人として仕えさせ 特に若かった陸奥宗光を側に置いた 人生
の最後近くに詐欺事件に引っ掛かって全財産を失ったのは 若い男性との枕語りで説きふ
せられたからだ」という具合に大浦お慶=好色 贅沢 商人として成功したが男で失敗し
たというお慶像が出来上がっていました。このお慶像の基となったのが明治初期の政治家
で講談師だった伊藤痴遊の全て事実無根の講談話だったのです。女性蔑視が江戸時代より
も増幅された明治時代、勤皇の志士を助けた成功した商人であっても やはり女で男なし
では生きられず 男によって破滅してゆくという話は 男性たちにどんなにか気に入られ
たことでしょう。しかし女性史研究が女性学者の手によって成されるようになった現在、
男性にとって都合のよい女性像のなかに埋もれていた女性たちの生涯の真実が次々と洗い
出されてきました。大浦慶についても1990年長崎の研究者本馬恭子さんの労作「大浦
慶女伝ノート」の出版によって 志士との関わりは全て無かったこと、若い男におぼれて
だまされたとされていた詐欺事件が 実は長崎県庁の高級官吏が取り仕切った籠抜け詐欺
事件であったこと、官吏は決して誤らないとの明治政府の方針の下 その官吏は何の咎め
もなく県庁に勤務し続け 大浦慶が契約を結んだ外国商人にたいして 契約は契約である
お慶の言葉を借りると「商法の道」はいかなることがあっても守らねばならない」との志
でもって 一切の債務を引き受けた事件であることが 明らかになりました。

ようやく歪められていたお慶像が資料によって訂正されて お慶がいかに志高い 清潔
な商人であったか 土農工商の階級制度の下 卑しめられていた商人という存在が開港地
長崎においていかに誇り高い存在であったか、が証明されて 私たちはとても嬉しく感じ
ました。

今年10月 長崎在住の男性が著した「長崎商人伝 大浦お慶の生涯」という本が店頭
に並びました。手にした私たち「長崎女性史研究会」のメンバーはびっくりし 本馬恭子
さんは怒りで凍りついていられます。新刊の本の大部分は本馬さんの著書の文章そのまま
の写しです。その上に講談本に源を発したお慶伝説が乗っているのです。勿論著作権法違
反なので その方面の処置は取られるわけですが 私たち長崎に住み かつて活躍した長
崎の女性たちを尊敬している人間にとっては許せない女性蔑視 大浦お慶にたいする侮辱
以外の何物でもありません。しかもその本はベストセラーにはいり 書店は大々的に売っ
ています。大浦お慶には子孫がおられませんので 名誉回復の裁判は起こせません。

これもまた一つのジェンダーの問題と私は考えています。男性によって 当時の社会の
制度のなかで男性にとって有利に働く意図をもって作られた女性像 その女性像が今も喜
び迎えられているという現在の社会のあり方を熟知して その波に乗った著作だという点にた
いて 言いようのない怒りを覚えています。

物理化学・文学・芸術・セックス、その他あらゆる方面において



「ジェンダーに侵された女性観」に対しての名誉回復を

「女性が」というと、書いたり評論したりするのは男性なのでその人がもっているジェンダー観がそのまま出る。構えて言わないまでもある男性をほめるとき、「女々しいところがなく実に男性的である」などと使う。今秋のノーベル賞2人受賞にもはしゃいで「少年よ、大志を抱け」と堂々とかいていた。いくら決まり文句でも男女共同参画社会、せめて「若者よ」と呼びかけをされなかったものか。男性にとって「めし、ふろ、ねる」の用事以外をする女性は考えられないというのがここでわかる。知性を売り物にしている作家、学者、一流新聞といわれるところの記者がボロッとだす言葉、引き合いに出す言葉で私たちはその人を見限ることもあるのだ。また、定年になって「離婚させていただきます」と切り出される夫は女性蔑視を妻にし続けていたために見限られていたことが多い。意識しないまま妻を見下していたのだろう。屈辱でした、と語る女性は多い。

女性を、男性と並び立てない人間としたジェンダーには今まで女性が公に反論することがなかったので言いたい放題の定着をしてしまった。しかし今日あらゆる方面で名誉回復が始まったと考えている。今号は郷土の誇る女性の一生を穢れた性のジェンダーで描いた上に、驚いたことに彼女を真摯に取り上げた学術書の内容からほとんどを盗作した新刊書に対する怒りを取り上げた。これなどこの両書を比べられる立場にあった女性史研究会のメンバーだったからこそ暴くことが出来たのであっても彼女らの目にとまっていなかったらどうだろう。

お茶の貿易商で明日への目をもち真の商道を貫いた女性が、財力で男漁りをした末の破産という男好みのジェンダーで笑いものになっていたわけである。男性に比べて圧倒的に少ない女性先駆者の数だが、無視又はこのようにして消されたのだという疑いを持っていいのかもしれない。

物理化学方面でノーベル賞に匹敵する成果をあげた女性もおおい。だが、受賞していない。それはなぜか。シャロン・バーチュ・マグレイン著、中村桂子監訳、中村友子訳の「お母さん、ノーベル賞をもらおう」に14人が挙げてあるが、これなど教科書にとりあげると女性の元気が取り戻せるし、女性蔑視のジェンダーも小さい時から払拭できて将来の社会生活において、よい男女関係が生まれると思うがどうだろうか。従軍慰安婦は究極の女性蔑視の上になりたったものだと考えている。女性蔑視と人種差別のダブル効果(!)がもたらす戦争の醜悪さだ。

あらゆる方面における女性の名誉回復はそれを公にすることによって日本の社会がもっているジェンダーを好ましい方向に作り変えるよい効果をもたらすのではないかと考える。